愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第 18 号
2017.5
39-58p

古代・中世における野間の歴史的景観

蔭山　誠一・永井　邦仁

愛知県知多郡美浜町に所在する権六遺跡の発掘調査成果をもとに、同町にある下高田遺跡・下高田丸山遺跡の遺構と出土遺物を調査し、古代から中世にかけての周辺地域の遺跡の再検討、および明治 17 年作成の地籍図の土地利用からの地形変遷の分析を行った。その結果、製塩遺跡があり、木簡にみられる調塩も行われた古代の景観と、大御堂寺などの寺院創建があり、丘陵部において窯業生産が営まれる中世の景観、野間船や内海船などの海運が盛んな中世後期から江戸時代にかけての景観とそこで営まれた交易の変遷を示した。

1．はじめに

愛知県知多郡美浜町大字野間・奥田を中心とする地域は、平治元年（1159）に京都で起こった平治の乱から逃れてきた源 義朝と鎌田正清が最後を遂げた地として、日本の歴史上著名な地である。本稿は、平成 26 年度に愛知県埋蔵文化財センターによって実施された同町所在の権六遺跡の発掘調査成果と周辺に所在する古代から中世にかけての遺跡との関係を再考し、併せて歴史地理学的手法を用いて、中世における野間地域の歴史的景観を考えるものである。

2．権六遺跡と周辺の遺跡の調査概要

まず権六遺跡の発掘調査成果を概観し、権六遺跡の周辺にて調査が行われている下高田丸山遺跡と下高田遺跡、奥田石畑製塩遺跡、奥田砂原製塩遺跡、海道田遺跡の調査概要について述べる。また下高田丸山遺跡と下高田遺跡、大御堂寺については、出土遺物の調査を実施しており、その所見も合わせて古代から中世における野間地域の開発の特徴を述べたい。

（1）権六遺跡の発掘調査成果

権六遺跡は美浜町大字野間字権六にあり、現在の名鉄知多新線野間駅の北西 100m の地点にある。遺跡の発掘調査は、平成 26 年度に美浜町町史跡である千人塚のある丘陵裾部を挟んで 2,400 ㎡が調査された。その結果、古墳時代前期の掘立柱建物 1 棟、土坑 1 基、平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物 8 棟、竪穴建物 1 棟、柱穴列 15 条、溝 10 条、土坑 54 基以上、自然流路 2 条、室町時代～戦国時代の溝 2 条、土坑 1 基、江戸時代後期以後の溝 3 条、井戸 1 基、土坑 2 基、自然流路 3 条、近代以後の溝 8 条、土坑 18 基、整地層 1 基が確認された（図 1）。出土遺物では、弥生時代中期の弥生土器、弥生時代後期の弥生土器、古墳時代前期後半の土師器、古墳時代後期の須恵器と土師器、平安時代の灰釉陶器と土師器、平安時代末～鎌倉時代の山茶碗と小碗、小皿、壺、甕、瓦、青磁、白磁、戦国時代の施釉陶器、江戸時代後期以後の施釉陶器・磁器、弥生時代中期以前の下呂石剝片が少数、鎌倉時代の滑石製石鍋、砥石、平安時代末～鎌倉時代の柱、礎板などがあり、平安時代末～鎌倉時代の遺物が多く出土した。

確認された遺構や出土遺物は、古墳時代前期、平安時代末～鎌倉時代、江戸時代後期、近代以後に主に分けられ、西側の 14A 区・14B 区の平安時代末～鎌倉時代の遺構では、中世 1 段階（12 世紀後半）・中世 2 段階（12 世紀末～ 13 世紀前半）・中世 3 段階（13 世紀前半～中頃）・中世 4 段階（13 世紀後半）、中世 5 段階（13 世紀後半～ 14 世紀前半）の遺構変遷を示した（図 2）。千人塚の丘陵の西側で西にある 14A 区に北北西から南南東に軸線を持つ区画溝があり、その東に西南西から東南東の軸線を持つ柵と思われる柱穴列 SA01・SA02 が形成され、この東西方向の柵に伴う掘立柱建物と柱穴列、

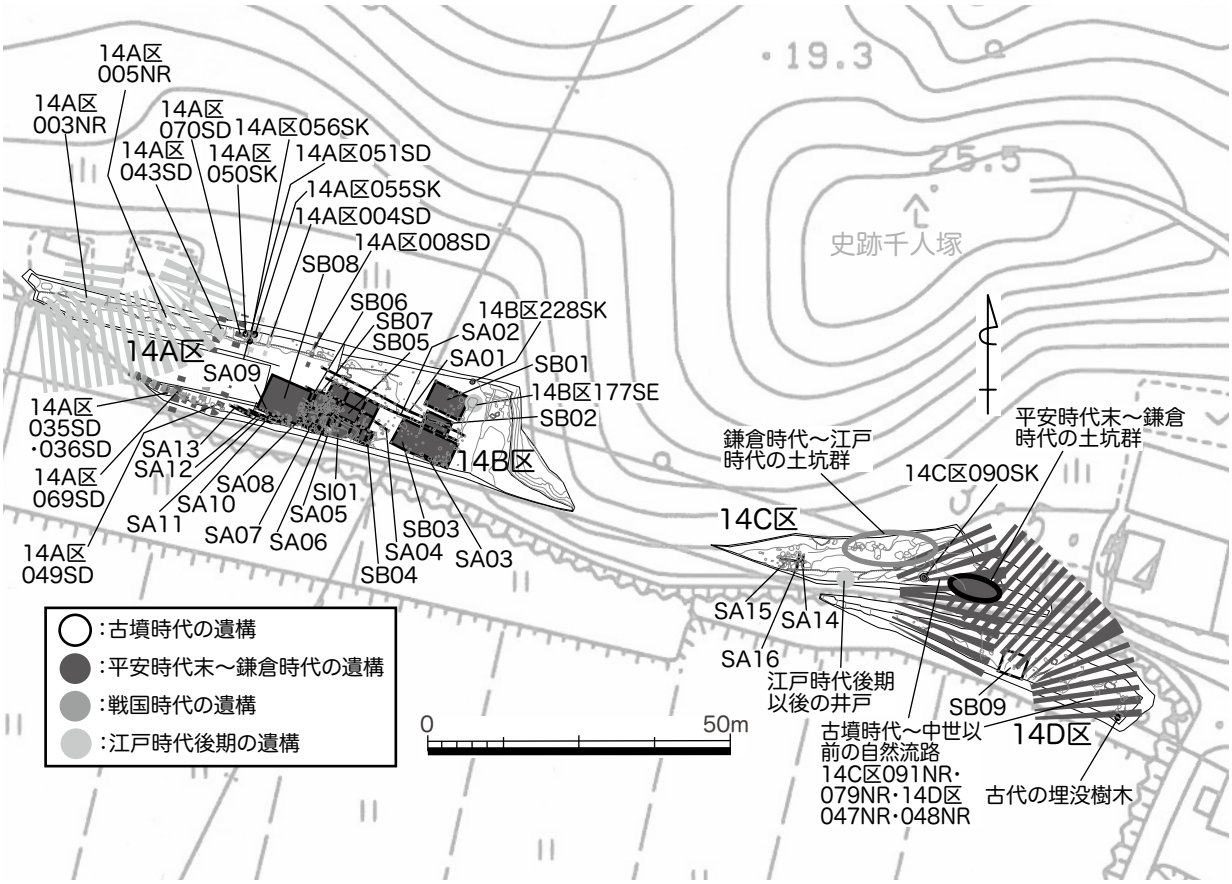


図1　権六遺跡の主要遺構（1:1,250）

土坑が中世1段階の12世紀後半から中世3段階の13世紀中頃に営まれ、中世4段階の13世紀後半にはこの柵に重複する位置に掘立柱建物や柱穴列が形成され、中世5段階の13世紀後半～14世紀前半には、調査区の南西側に方形区画の溝やそれに軸線を合わせた柱穴列が形成されたものと考えた（蔭山編 2017）。（蔭山誠一）

（2）下高田遺跡の調査概要

下高田遺跡と下高田丸山遺跡は、美浜町大字野間字下高田・字丸山にあり、先に述べた権六遺跡の南西約750mにある。権六遺跡とは杉谷川を挟んだ対岸の丘陵裾部から沖積地に下りた地点に立地する。

下高田遺跡*は、昭和41年（1966）に行われた周辺の耕地整理事業の工事によって、多くの遺物が出土した。この工事の前後に密蔵院住職の服部秀雄氏により採集された遺物が、現在も密蔵院に残されている。遺跡については、立松 宏氏（立松 1967）や山下勝年氏（山下 1972）、美浜町誌資料編二（山下・奥川 1985）などで紹介されている。美浜町誌によれば遺跡は1,000㎡以上の広がりがみられ、確認された層序は、表土層下に固くしまった厚さ20㎝前後の黒褐色土層があり、その下に厚さ50㎝程で砂質、黒色を呈する遺物包含層があって、最下層に礫層の無遺物層になる。服部氏によれば、直径1mのピット状に貝の堆積層がみられた地点があった。採集された遺物では、縄文時代では、縄文時代早期末葉の塩谷式土器、縄文時代前期後葉の清水ノ上Ⅲ式土器、縄文時代中期中葉から後葉の里木Ⅱ式土器と咲畑式土器、縄文時代後期の縄文と沈線が組み合わされた土器片が少量ある。遺物の主体となる弥生時代では、

*遺跡名において下高田は「しもこうだ」と呼ばれているが、密蔵院住職服部秀弘氏によると、地元では「しもたかだ」と呼ばれているという。

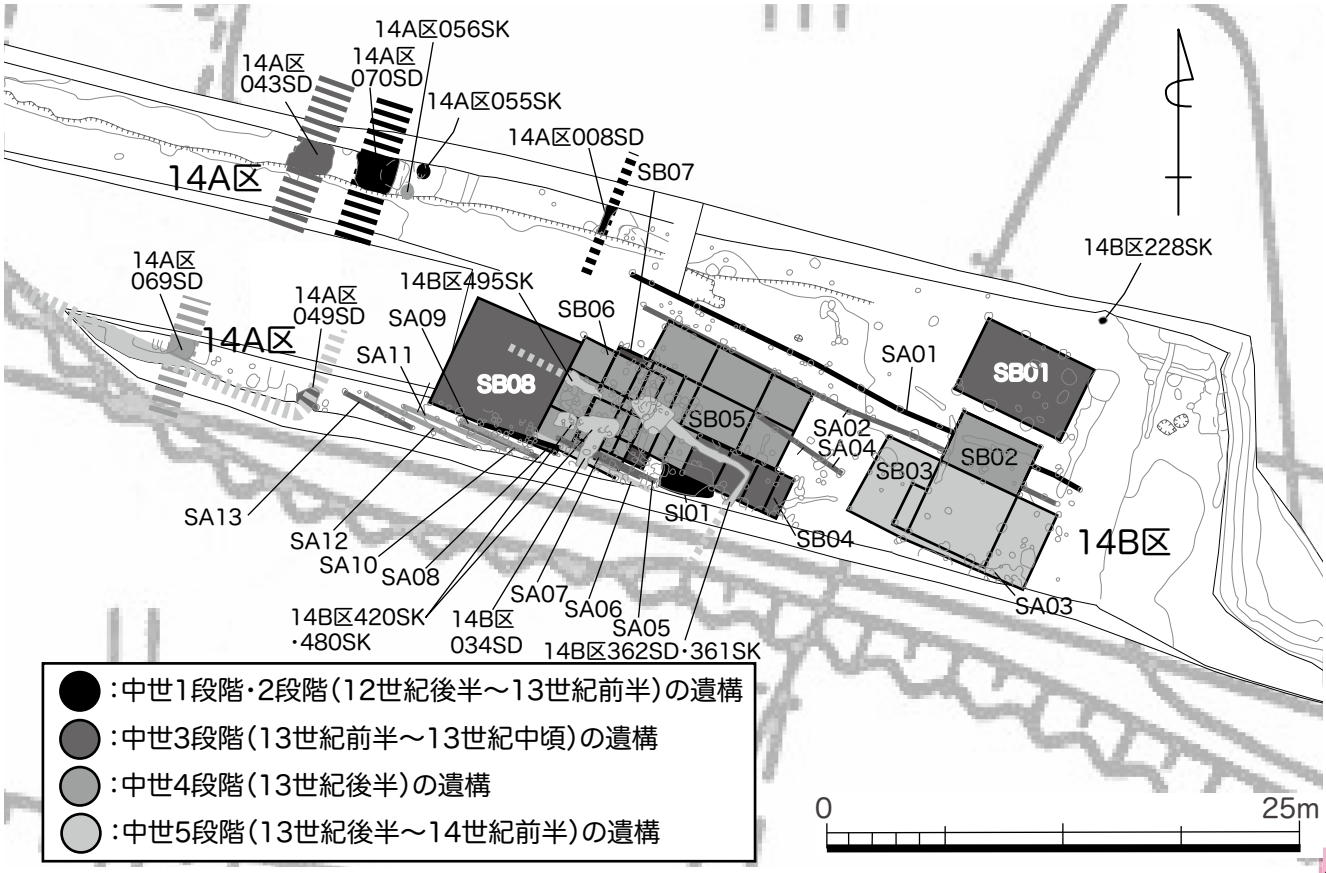


図2　権六遺跡における中世の遺構変遷(1:400)

弥生時代前期の遠賀川式土器から、弥生時代中期前葉の条痕文土器、櫛描文土器、弥生時代後期の高杯、甕が多数あり、弥生時代中期以前のものと考えられる下呂石やチャートなどの石鏃や剥片、ハイアロクラスタイトの磨製石斧、砂岩の石皿、叩き石などがある。古墳時代前期後半の松河戸式の高杯や甕、古墳時代後期初頭～末の須恵器、土師器、製塩土器も比較的多くみられるのも特徴である。中世にかかる時期のものとしては、鎌倉時代の山茶碗、甕、瓦などがある。また時期は不明であるが、礎板と考えられる小口面を切断した板材が残されており（写真1・2)、遺跡には柱を立てた掘立柱建物跡などが存在した可能性が高い。(蔭山誠一)

今回、密蔵院住職の服部秀弘氏によりその所蔵の資料を実見させていただいた。その結果、古墳時代中期には、口径の大きな須恵器杯蓋（図3-1)・杯身（図3-2）と鼈（図3-4）がある。東山61号窯式期とみられ、古墳時代前期の遺物がほぼ皆無であることから6世紀前半に集落が開始されると考えられる。製塩土器知多1類（図-8）も数点所在する。これに後続するのが須恵器杯蓋（図3-3)・平瓶（図3-5）で東山50号窯式～岩崎17号窯式期で、概ね7世紀半ば～後半で、高蔵寺2号窯式期（8世紀初頭）の杯（図3-6)・鼈（図3-7）もある。当該期の製塩土器（図3-9）は3点あり、脚部接合部径約2.0cm、長さ約8.0cmで知多4A2類とみられる。ただし8世紀後半以降の須恵器や灰釉陶器は全くみられず、12世紀以降の山茶碗まで遺物の空白期となっている。中世の遺物では、常滑5型式～6型式の山茶碗4点（写真3-1～4)、瓦（写真3-5)、土師器皿（写真3-6～8）甕（写真4-1）などがある。(永井邦仁)



写真1 下高田遺跡出土礎板1



写真2 下高田遺跡出土礎板2

(3) 下高田丸山遺跡の調査概要

下高田丸山遺跡は下高田遺跡の南約130mに

ある水田の中にある残丘状の畑地にある。遺跡の範囲は、東西約 38m、南北約 20m の舟形の範囲で、昭和 51 年に杉崎 章氏、磯部幸男氏、山下勝年氏等により発掘調査が行われた（杉崎・磯部・山下 1977）。トレンチは遺跡の西側に幅 2m、長さ 10m の第 1 トレンチと 8m の第 2 トレンチの 2 ヶ所を設定し（図 4）、美浜町誌によれば遺跡の黄褐色粘土層を基盤とした小丘陵の途面を取り囲むかたちで海性砂層内に形成された遺跡であり、遺跡の包含層は中世における撹乱を全体に受けているものとされている。出土遺物は縄文時代中期・後期に遡る縄文土器片が少数あり、主体は弥生時代中期前葉の続水神平式土器・朝日式土器から弥生時代後期の寄道式土器にあり、古墳時代前期初頭の瓢型壺、S 字状口縁台付甕、高杯、古墳時代後期の須恵器杯身、杯蓋、高杯、壺、甕、奈良時代の須恵器杯身、平安時代の灰釉陶器の碗、平安時代末から鎌倉時代の山茶碗、小碗、小皿、甕、瓦が報告されている。

下高田丸山遺跡の第 1 トレンチと第 2 トレンチの状況をまとめると（図 5）、第 1 トレンチでは、表土層の A 層から基盤層とされた H 層の黄褐色粘土層の 7 層が確認され、①B 層・D 層・E 層の間にはそれぞれ黄褐色粘土層を介在する、②縄文時代から中世にわたる各期の遺物が各層から混在して出土する、③極めて部分的に E 層の灰黒色砂層に弥生式第 1 群土器（続水神平式土器）が出土し、④ D 層の黒褐色砂層以上の遺物包含層から古代から中世にかけての遺物が多いと報告されている。第 2 トレンチでは、表土層の A 層から基盤層とされた H 層の黄褐色粘土層の 9 層が確認され、① B 層～ C’ 層は遺物が散漫に出土する桑の木による植栽の影響を受けた撹乱層、②弥生時代から中世にわたる各時期遺物が各層から混在して出土する、③ G 層の灰褐色砂層から行基焼きが出土する、④遺物包含層の上半から古代から中世にかけての遺物が出土すると報告されている。

この遺物出土状況と第 1 トレンチ北壁と東壁、第 2 トレンチ東壁と南壁の層序図（図 4･5）をみると、約 10m 離れた第 1 トレンチと第 2 トレンチの D 層より下位の地層部分は、鎌倉時代の幅 10m を超える流路か大型の区画溝が南南西から流れてきたものがやや西に折れて北北西に向かう一つの遺構である可能性が指摘できる（図 4 の遺構の想定）。（蔭山誠一）

今回、美浜町教育委員会の協力を得て、下高田丸山遺跡の出土遺物を実見する機会を得た。7 世紀代の土師器伊勢型甕（図 3-12・13）や甑または鍋の把手（図 3-20）、須恵器高杯（図 3-11）がある。そして 8 世紀代は鳴海 32 号窯式とみられる須恵器杯（図 3-10）1 点のみである。当該資料は黒鉄色で仏碗を写した器形である。図 3-29 は黄褐色で軟質焼成の平瓦である。凸面の縄タタキ痕が潰れ凹面の残存状況は良くない。側縁の面取は海道田遺跡（後述）の平瓦と同一であるが、中世瓦の可能性もあるので時期は特定できない。灰釉陶器は黒笹 90 号窯式期（9 世紀後半）の碗（図 3-16）が 1 点のみである。図 3-17・18 は山茶碗、図 3-15 は土師器伊勢型鍋、図 6-21 は管状土錘で、いずれも 12 世紀代と推定される。加えて、丸山地点では中世の瓦も出土している。中世前半の丸瓦（図 3-24・25）・平瓦（図 3-26・27）は赤灰色を呈する陶器のような焼成で、厚さもある大型の瓦である。図 3-23 は凸面に釉着と灰釉がみられる。これらは権六遺跡出土の丸・平瓦と同じ特徴で同一窯産と考えられる。ともに軒瓦はなく、出土量が少ない点や権六遺跡では柱穴から出土していることを考慮すると、それぞれの地点で瓦葺き建物を想定するよりも、搬出途中で廃棄・転用された可能性が高い。なお図 3-28 は中世後半以降の丸瓦である。

以上の 2 地点の出土遺物をもとにした古墳時代以降の遺跡の消長は以下のようになる。6 世紀初頭に始まった集落は、6 世紀後葉～ 7 世紀前葉の空白期間を経て 7 世紀中葉～ 8 世紀中葉の展開がみられる。これに対して 8 世紀後半～ 11 世紀代の遺物は極端に減少し、当該地点から集落の中心が移動していた可能性が高い*。その後、中世瓦や陶器類がみられる 12 世紀以

*杉崎 章氏は下高田遺跡の報告書（美浜町教育委員会 1977）の総括で奈良・平安時代の遺物が「一時期うすくなる」とし、「丁度そのころ」に創建された海道田遺跡（奥田廃寺址）と対照的にみている。

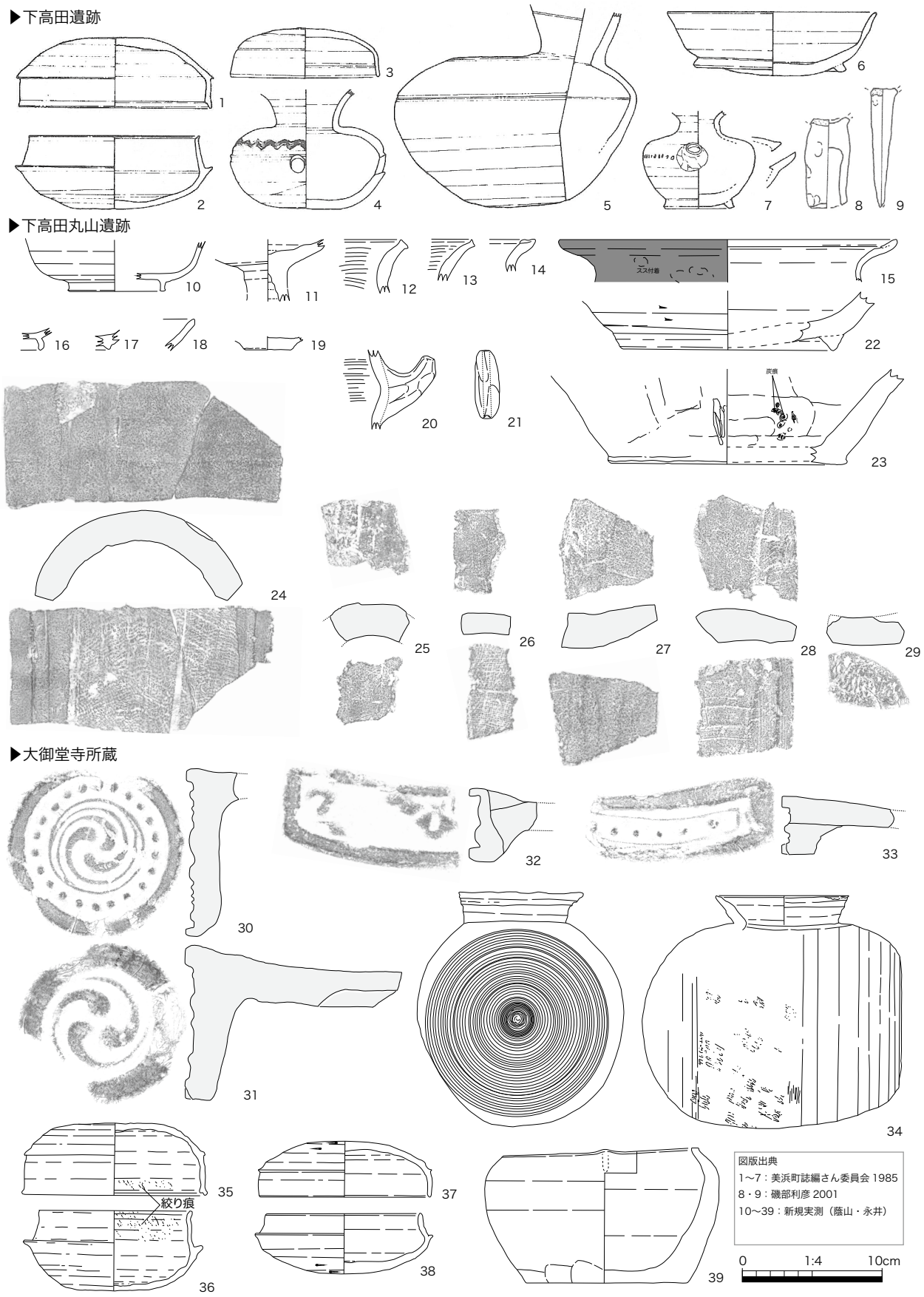


図3　下高田遺跡・下高田丸山遺跡出土遺物と野間大坊所蔵の遺物



写真3　下高田遺跡出土山茶碗と瓦、土師器皿



写真4　下高田遺跡出土甕

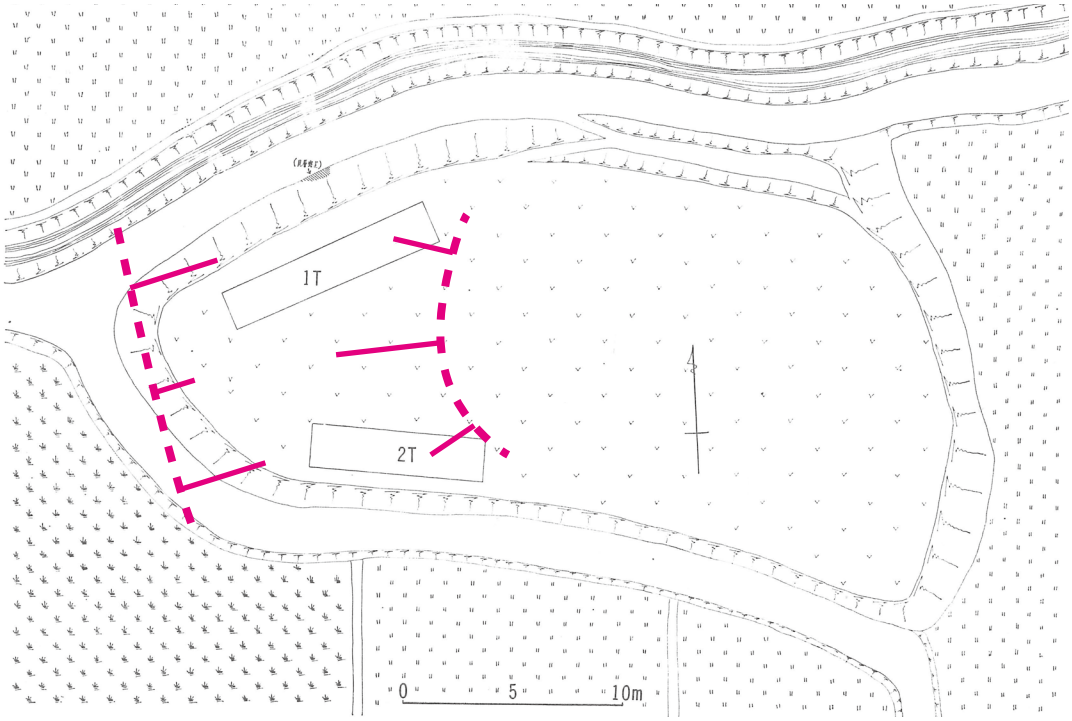


図4　下高田丸山遺跡の第1トレンチ・第2トレンチと想定遺構

（杉崎 章・山下勝年・磯部幸男1977『下高田遺跡』「美浜町文化財報告第4集」美浜町教育委員会、挿図第3を転載・一部加筆）

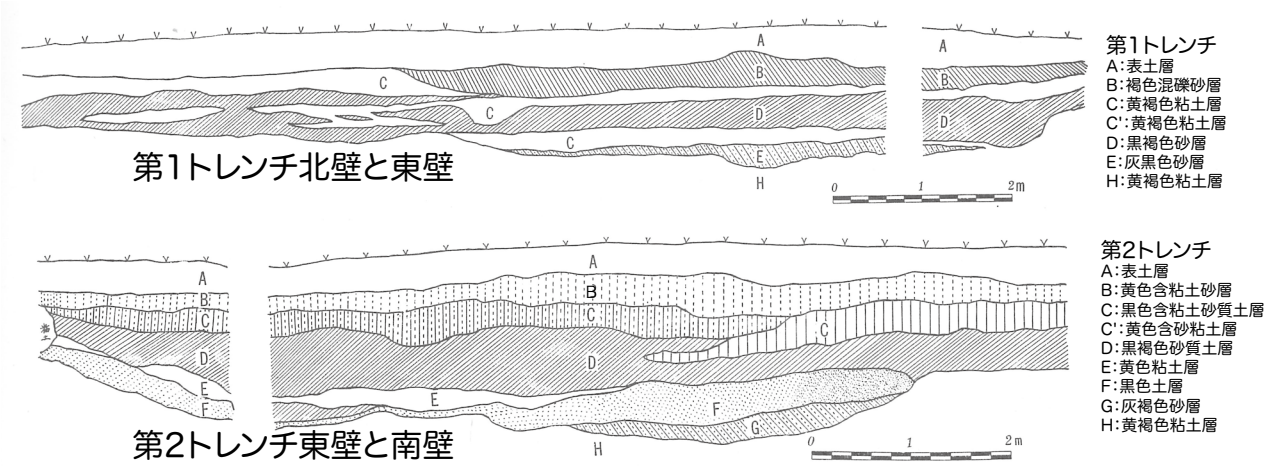


図5　下高田丸山遺跡の第1トレンチ・第2トレンチの土層断面

（杉崎 章・山下勝年・磯部幸男1977『下高田遺跡』「美浜町文化財報告第4集」美浜町教育委員会、挿図第4を転載・一部加筆）

後は再び増加傾向に転じ、13 世紀の出土遺物が多いように思われる。長田氏の居館や保延 6 年（1140）に立券された野間内海庄との関連が注目される。（永井邦仁）

（4）大御堂寺の中世瓦

下高田遺跡の西約 300m に位置する鶴林山大御堂寺は、同寺伝によれば天武朝の阿弥陀寺にルーツがあり、その後承暦年間（1077 ～ 1081）に白河天皇の勅願で大御堂寺になったという。一方、『吾妻鏡』文治 2 年（1186）閏 7 月 22 日条には源 義朝の墓（廟堂）に関連して、仁安元年（1167）に尾張国司（目代）となった平 康頼が小堂を建立した功績に対し、阿波国麻殖保司に任じたことが記されている*。そして建久元年（1190）に頼朝は上洛の途上に同墓を参詣し整った寺院に感心したという**。これが文献史料で確認される大御堂寺の初見である。この他大御堂寺には、頼朝が寄進したとされる大門や、建長 2 年に鋳造された梵鐘があり、後者は鎌倉幕府第 5 代将軍藤原頼嗣によって寄進されたと伝えられる。

大御堂寺には、多数の考古資料が保管されている***。それには境内で採集された中世の軒瓦 4 点が含まれている。瓦はいずれも無釉で明黄褐色系の色調で、笵詰時の離れ砂は不使用である。珠文のある三巴文軒丸瓦（図 3-30）は、瓦当面径 11.8cm でさらに巴文の小型化が進んでいる。半截花文軒平瓦（図 3-32）は、同文の瓦が下平井古窯で出土している。製作技法は、笵詰中の瓦当部に平瓦を接合し凹面側に粘土を補充するもので、平瓦部の接合位置がほぼ同じとなる下平井古窯の瓦（図 7-70）も、同じ製作技法であろう。一方、連珠文軒平瓦（図 3-33）の製作技法は、顎部貼付け技法****である。同技法は高蔵遺跡や熱田神宮境内出土の連珠文軒平瓦にもみられ 12 世紀末～ 13 世紀前葉に比定されるが（永井 2014）、当該瓦はそれらに比べて顎部幅が短いことから後出的と評価される。ところで、珠文のない三巴文軒丸瓦（図 3-31）は瓦当面径が 10.8cm とやや小さく、丸瓦部の幅も狭くなることから、塀や垣に使用されたものと思われる。なお、図 3-30 の裏面に「大御堂寺 □廟 土壘 附近」、図 3-31 の凹面に「大正四年 大御堂寺 茶所建築 際発掘」、図 3-32 の凸面に「本堂附近」、図 3-33 の凸面に「大正五春 大御堂寺後方畑ヨリ発掘」とそれぞれ墨書があって、瓦の出土地点が判明する。それによると大御堂寺北側の耕作地で出土した連珠文軒平瓦はやや離れているが、他は同寺本堂とその付近で出土したものである。このことから中世の瓦葺き建物は現境内の東半部に存在したと推測される*****。

以上の他に、大御堂寺には出土地不詳の須恵器や山茶碗などの中世陶器が所蔵されている。図 3-34 は須恵器横瓶で 7 世紀代。図 3-35 ～ 38 は須恵器杯蓋・杯身の組み合わせで図 3-35・36 が 5 世紀末～ 6 世紀前葉、図 3-37・38 が 6 世紀後葉～ 7 世紀初頭とみられる。付近にあった古墳や集落遺跡の出土品とも考えられる。図 3-39 は中世の片口鉢で平底である。常滑窯産とみられ 12 世紀代である。また実測図は作成しなかったものの山茶碗類が多数ある。

（5）海道田遺跡と奥田石畑製塩遺跡

下高田遺跡や大御堂寺から北約 1.7km の地点には、古代瓦が出土する海道田遺跡（奥田廃寺址）がある。遺跡の立地する丘陵は、南北長約 700m、東西幅 70 ～ 100m の細長い尾根であり、数か所にわたって切り通しや奥田小学校によって寸断されている。そのため大己貴神社

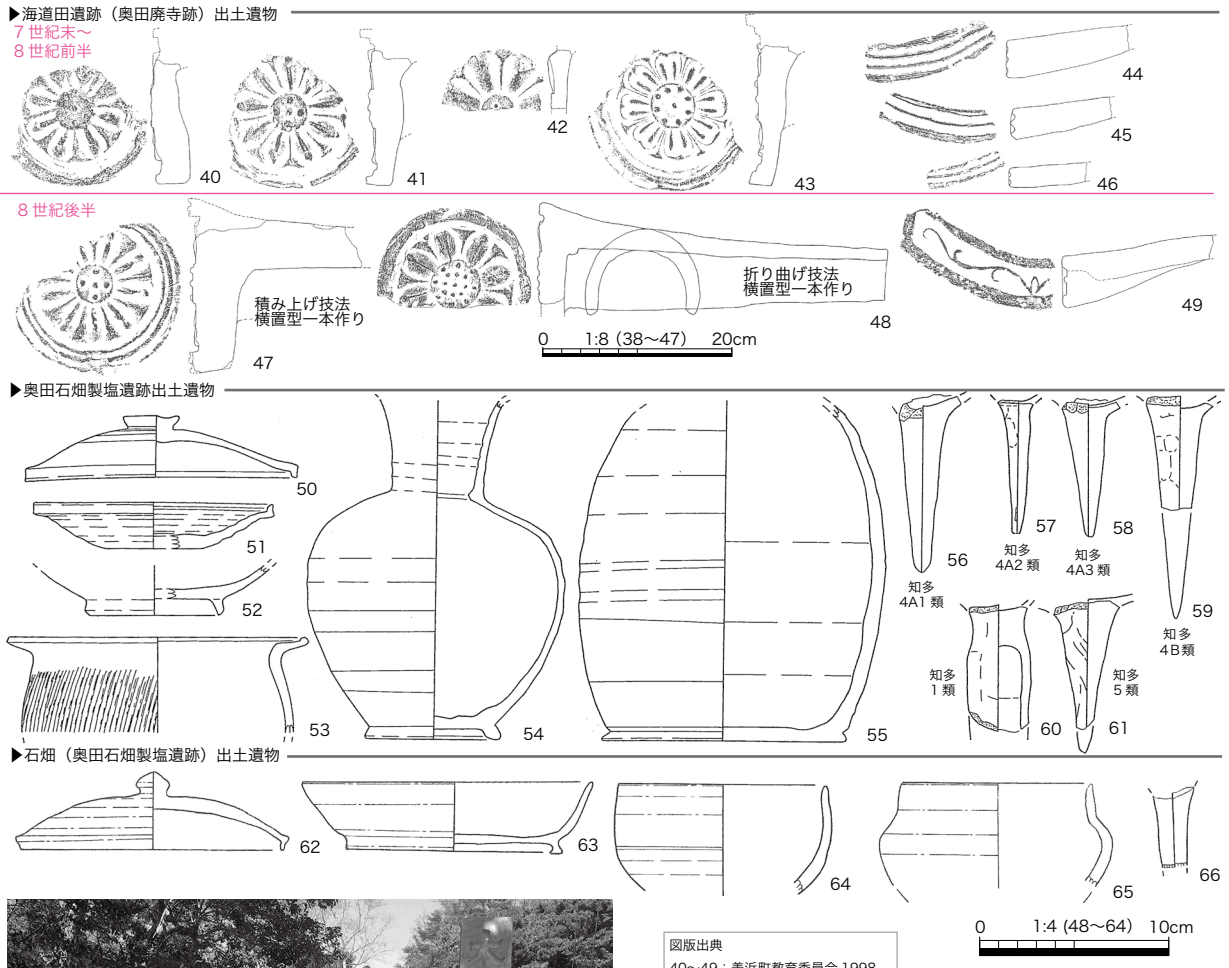
* 『吾妻鏡』閏七月二十二日「廿二日癸卯、前廷尉平康頼法師浴恩沢、可為阿波国麻殖保々司元平氏家人、散位之旨、被仰所也、故左典厩義朝墳墓、在尾張国野間庄、無人于奉訪没後、只荊棘之所掩也、而此康頼、任中赴其国時、寄附水田卅町、建小堂、令六口僧修不断念仏云々、仍為被酬件功、如此云々、」

** 『吾妻鏡』二十五日丙午「以尾張国御家人須細治部大夫為基、為案内者、到于当国野間庄、拝故左典厩廟堂平治有事、奉葬于此所云々、給、」

*** これらの考古資料には尾張・知多地域だけでなく東北地方の出土遺物も含まれている。その大半は大御堂寺住職であった水野興円氏（故人）によって集められたものである。

**** 平瓦凸面に顎部を貼り付けて瓦当を成形した後に笵に押し当てて施文する方法。

***** 19 世紀前半の大御堂寺『五重大塔再建寄附物勧進帳』では、享禄 4 年（1531）に兵火で伽藍諸堂が焼失し、天文年中に本堂などを再建したことが記されている。



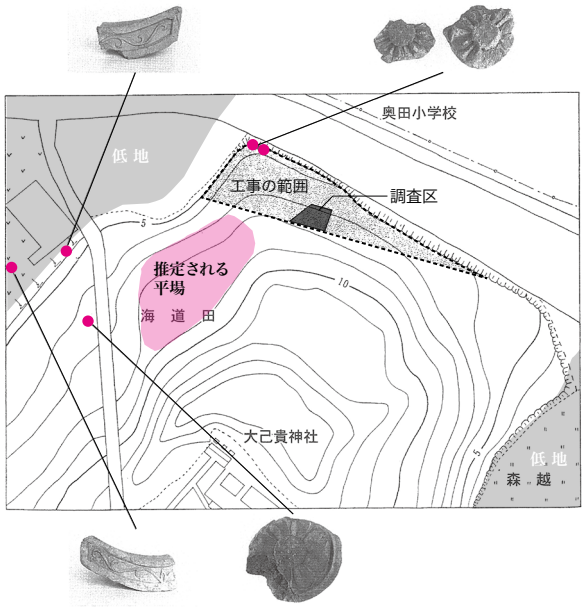
図版出典
40～49：美浜町教育委員会 1998
50～61：立松彰 2010
62～66：美浜町教育委員会 1998



大己貴神社南側の丘陵端部地形（南から、平成 29 年 3 月撮影）



海道田遺跡の発掘調査地点（北西から、平成 29 年 3 月撮影）



調査区・古瓦採集地点と寺院跡推定地（美浜町教育委員会 1998 を改変）

図6　海道田遺跡と奥田石畑製塩遺跡

の所在する先端部（標高約 11m）は独立丘陵のようになっており (図 6 左下)、その南側には、東方の丘陵地から流出する山王川と青山川の合流点がある。現在は神社境内に繁茂する樹木の間から垣間見るしかないが、かつては野間の海岸が一望できたと想像される。当該遺跡は、大正時代から水野興円氏によって古代瓦が採集されたことによって、その存在が知られるようになった*。

遺跡の範囲は、大己貴神社北西側の斜面を中心に広がっているが（図 6 右下）、平成 6 ～ 7 年に行われた緊急調査で出土した古代瓦の大半は二次堆積層に含まれていたとみられることから（磯部他 1998）、遺跡の中心は丘陵頂部から西側斜面にあったと推測される。おそらくいくつかの平場に分かれて瓦葺き建物が造営されたと考えられる。そしてこの位置から西側は砂の堆積する低地であり、約 720m 西方の現海岸線付近の砂堆上にある奥田石畑製塩遺跡（奥田製塩遺跡石畑地点）は、昭和 47 年（1972）に発掘調査が行われて多量の製塩土器が出土している。また、山王川河口を挟んだ南側にも製塩土器が出土する奥田砂原製塩遺跡（奥田製塩遺跡砂原地点）がある。これらは総延長約 1.5km もの範囲内に点在する製塩遺跡であり、後述するように 7 ～ 9 世紀にかけて最盛期になると考えられる。

海道田遺跡の古代瓦では、軒丸瓦 6 型式と軒平瓦 4 型式が確認されており（梶原 2010）、7 世紀末～ 8 世紀前半の一群と 8 世紀後半の一群に大別することができる（図 6-40 ～ 49）。前者に属する軒丸瓦では、カキヤブリを行ったうえでやや低い位置で丸瓦部を接合しており、ほぼ同じ製作技法であると評価される（図 6-40・41・43）。軒平瓦は数種類の施文具が想定されるが、基本的に凸面縄タタキで無顎となっている。一方、後者の軒丸瓦の製作技法は、積み上げ技法一本作り（図 6-47）と折り曲げ技法横置型一本作り（図 6-48）の二者がある（梶原 2010）。軒平瓦（図 6-49）は一枚作り平瓦に顎部を付加したものである。

軒丸瓦の瓦当文様は、東海道諸国の沿岸部に分布する重圏文縁複弁八弁蓮華文（図 6-43）に加えて、九弁（図 6-41・47）という花弁数は、伊勢北部の南小山廃寺跡（桑名市）や西三河南部の寺領廃寺（安城市）などにみられ、これらの伝来に海上交通が関わっているものと考えられる。また注目点として、図 6-41 から図 6-47 へと製作技法が大きく変化しながらも文様の基本構成が踏襲されており、瓦当文様を揃える意図が 8 世紀第 3 四半期まで継続していたことも挙げられる。その後軒瓦は図 6-48 と図 6-49 の組み合わせに変更され、ほぼ 8 世紀代で造瓦活動は完了するとみられる。

奥田石畑製塩遺跡で多量に出土した製塩土器は、知多 4A1 ～ 3 類・4B 類が主体で、これに若干の知多 1 類と同 5 類が加わる（図 6-56 ～ 61・66、立松 2010）。したがって、当地における土器製塩は、古墳時代中期に開始されその後空白期間を経て、7 世紀後半～ 9 世紀代に生産の最盛期になると評価される。共伴遺物としては須恵器（図 6-50・51・54・62 ～ 65）、土師器甕（図 6-53）、灰釉陶器（図 6-52・55）がある。時期は知多 4 ～ 5 類と併行し、特に 8 世紀半ば～ 9 世紀後半が目立つ。これに対して遺構は、炉跡が検出されているものの製塩との関連は不明であり、遺跡の構造については不明点が多い。

以上のように、8 世紀代の海道田遺跡周辺の砂堆には土器製塩の場があり、出土土器からはその生産に関わった人々の居住も推測される。それらの景観は、規模こそ大差はあるが同様の立地にある知多半島北部の松崎遺跡・上浜田遺跡の構造（早野 2010）に類似したものであっただろう。また平城宮跡出土の木簡「･□□〔富カ〕具郷野間里和尓部臣牟良御調塩･□□〔平カ〕元年十月十九日郷長和尓部安倍」や「・尾張国知多郡富具郷野間里丸部安麻呂　・調一斗　天平七年八月」に記された調塩は、ここから搬出された可能性が高い。このように製塩業が集約

*水野 1922。主に「瓦谷」の瓦窯跡（現在所在不明）に関する記述であるが、当該地点北西に「大御堂寺址と伝へて居る寺址」があり「同時代の古瓦」が出土するとしている。水野氏が採集したとみられる大御堂寺所蔵資料には「カイド田」などの注記がある。

的に進められた結果、先述のように下高田遺跡など野間地域の南部における集落の縮小につながったものと考えられる。

海道田遺跡の瓦葺き建物は、これら砂堆を含む野間地域の浜を見下ろす位置にある。このような特徴的な地形は古代寺院として選地されることが多いので、瓦以外に寺院の要素が乏しい当該遺跡も寺院遺跡と推測するが、それに加えて西側斜面という立地は、海上から視認に有利であり、全長約 5.5km におよぶ野間地域の浜における調塩搬出港の所在を示すランドマークだった可能性が高い。このことから、奈良・平安時代の海道田遺跡と奥田石畑製塩遺跡はほぼ一体で運営されていたと推測され、寺院造営氏族として木簡に記載された和邇部（丸部）氏が有力な候補になる。ただしその造営は 8 世紀後半までかかって完遂され、実質機能していたのは 9 ～ 10 世紀代であったと推測される。

（6）古代から中世の野間における開発の特徴

海道田遺跡の瓦生産窯は、水野輿円氏が報告した「瓦谷」地点（水野 1922）と打越遺跡が指摘されている（磯部他 1998）。これらは青山川の流れる谷に面しており、この谷が寺院造営を支える場になっていたものと考えられる。また当該地点は海道田遺跡東方約 1km 以内でもある。試みに大字上野間・奥田・野間地区における縄文～奈良時代の遺跡所在地をみると（図 7 右）、石鏃の出土した坪山遺跡以外はほとんどが海岸線のみえる谷口に立地している。すなわち奈良時代や平安時代の半ばまでの集落・生産域は海岸の低地とその縁辺に限られるのである。

ところが中世瓦や山茶碗の生産窯の分布はこれと大きく違ってくる。美浜町域ではこれまでのところ蛭谷古窯・滝谷 A 古窯 (滝谷古窯)・下平井古窯・青山池古窯群（午池古窯）*で中世の軒瓦が確認され、それ以外に奥田前古窯・坪山池 A 古窯でも中世瓦が出土している。これらの窯跡は谷奥に所在していることが多く、谷口からの距離が 2 ～ 3km になるものもある。

滝谷 A 古窯は、山王川とその支流を遡った谷奥部に所在する窯跡である。そこで出土した半裁花文軒平瓦（図 7-69）は、京都の鳥羽離宮東殿のものと同文であることや、陶器質に焼成されていることから、その造営の中心時期となる西暦 1131 ～ 1155 年間（柴垣 1982）に近い時期と考えられる。

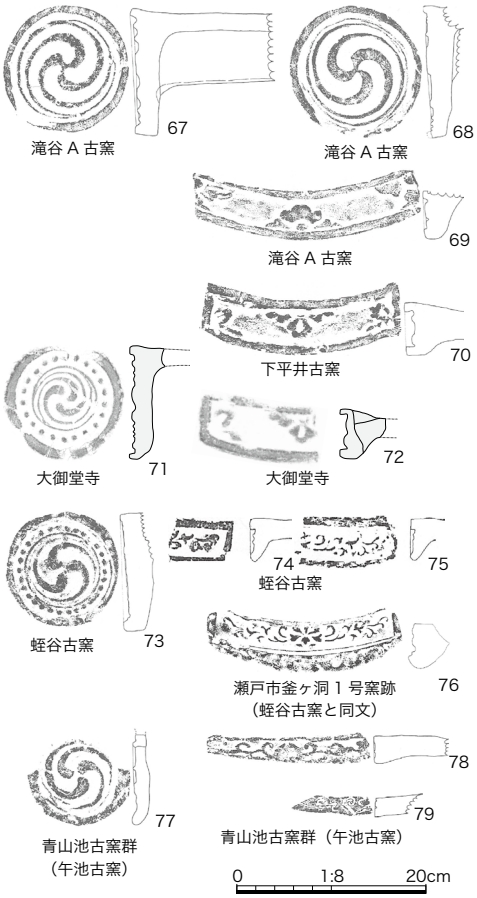
下平井古窯は山王川水系の谷に立地する。先述のように当該窯の軒平瓦（図 7-70）は大御堂寺のもの（図 3-32）と同文である。大御堂寺の創建については先述のように平康頼により着手され、その創建瓦とみるならば、彼が鹿ヶ谷事件で失脚するまでの西暦 1167 ～ 1177 年間と推定される。この頃から尾張地域では在地向け瓦生産主体となるが、同窯も大御堂寺への供給が目的であったとみられる。

蛭谷古窯出土の軒瓦は橙色で軟質焼成である。当該軒瓦は瀬戸市釜ケ洞 1 号窯跡出土の軒瓦と同笵の可能性が高いとされ（柴垣 1989）、両者の先後関係は不明であるが、後者では古瀬戸様式の前Ⅰb・Ⅱa 期、尾張型山茶碗の第 6 型式の陶器類が出土していることから（佐野 2007）、蛭谷古窯も 12 世紀末～ 13 世紀前葉と想定されよう。ただし両者間では顎部の形状が異なっていることから、製作技法の変化があったことは確かである。なお蛭谷古窯は唯一、稲早川水系の谷に所在する窯跡でその河口は入江北端の上野間にある。また、当該窯からの搬出先は不明である。

青山池古窯群は山王川支流の青山川の谷頭付近にある。軒平瓦は顎部を作らず太い線の唐草文となっている。図 7-79 のように線刻で施文されたものもある。当該窯跡群では常滑窯 5 ～ 6 型式に相当する甕が採集されており（愛知県教育委員会 1999）、概ね 13 世紀中葉と考えられる。当該窯製品の搬出先も不明である。

以上のように野間の浜辺を取り巻く丘陵部では、12 世紀中葉の滝谷 A 古窯を最初として 13 世紀中葉まで瓦生産が行われている。これらは谷頭に分散して立地しているが、谷筋は稲早川・

*午池古窯は青山池の「手前北側の丘陵西斜面に」「五・六基の古窯が」あり、盗掘にあっているという（美浜町誌編さん委員会 1985）。遺跡分布調査の報告書（愛知県教育委員会 1999）では同窯の記述は全くないが、青山池古窯群の位置と状況はこれに符合しており、同一のものと判断する。



図版出典
67～70・74・77～79：美浜町誌編さん委員会 1985
71・72：常滑市誌編さん委員会 1974
73：松澤・佐野 2000
75・76：永井実測・採拓

野間地区（美浜町）における中世瓦の変遷

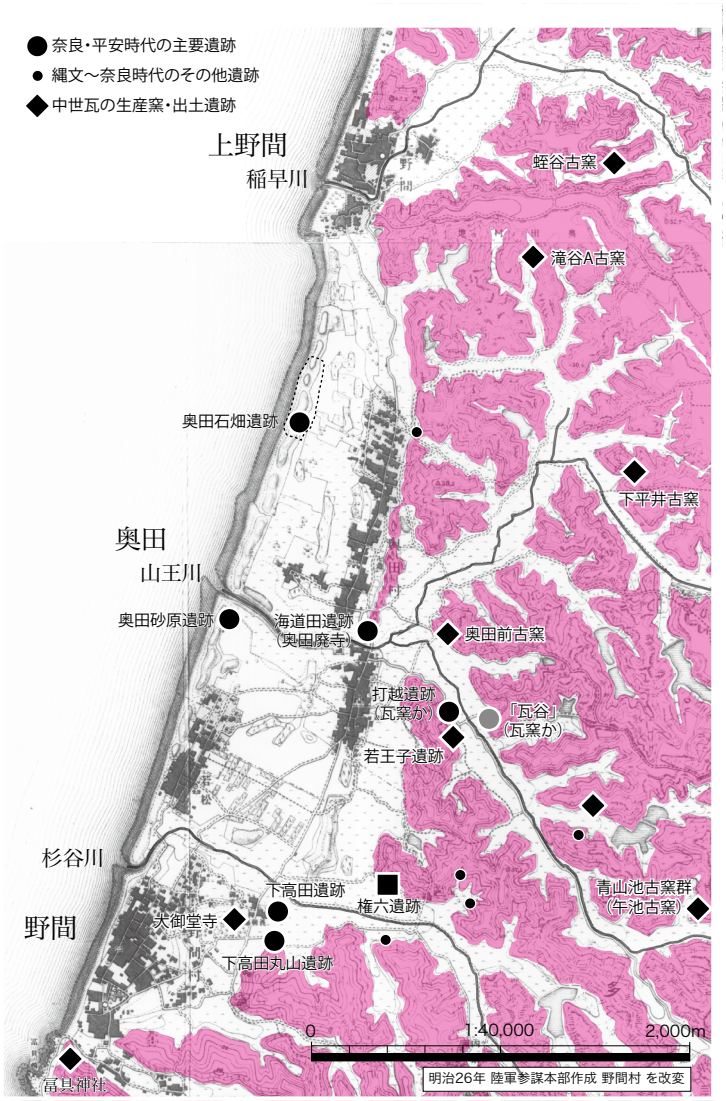


図7　中世の瓦と瓦窯跡

山王川の河口につながっており、それぞれ上野間と奥田に搬出港が想定される。これに加えて野間地区の杉谷川流域には、中世瓦の出土する権六遺跡や下高田丸山遺跡がある。これらの生産窯は不明で、下平井古窯と大御堂寺との関係を考慮すると山王川水系に所在する可能性もあるが、杉谷川上流の谷頭も想定される。特に奥田は複数時期の瓦搬出が考えられ、調塩搬出をしていた奈良時代以来の主要港に位置付けられる*。

そしてこれらの窯の分布域は、野間内海庄域（上村 1989・2010）の一部に相当する。野間内海庄は、鳥羽東殿に造られた安楽寿院に寄進され保延 6 年（1140）に立券、康治 2 年（1143）に不輸不入の権利が認められている**。この経緯も考えあわせると、滝谷 A 古窯における瓦生産は立券を契機に開始され、その後の瓦生産も荘園経営のなかで進められたものと考えられる。なお野間内海庄の成立に関しては、伊勢国の対岸という位置関係から、12 世紀前葉には既に開発が始まっていた可能性が指摘されているが（上村 1989）、荘園域では瓦を含む窯業生

*現在は上野間漁港と富具崎漁港があり奥田にはない。本稿で藤山が指摘するように、砂堆の形成は中世以降も進んでおり、丘陵部開発で増加した土砂の流出も想定すると、やがて港の機能は低下したと考えられる。
**康治二年八月十九日太政官牒写（安楽寿院文書）。

産はまだ始まっておらず（中野 2012）、具体的な開発の様相については不明な点が多い。（永井邦仁）

3．地籍図の土地利用からみた野間地域の地形と歴史地名

（1）方法

ここでは明治 17 年作成の愛知県公文書館所蔵『地籍字分全図』（以下『地籍図』と略す）を底本として用いる。今回は美浜町大字野間の周辺地域の地形と遺跡との関係を解析するため、明治 17 年作成における地籍図の野間村、奥田村、上野間村の図化を行い、解析を行った。地籍図の解析方法は、地籍図に記載された地目により寺院・神社・宅地・墓地・畑・林・藪・森・山・田・草生・塩湊・葭生などに色分けして図化した（図 8）。そして山を主体に森、畑が主に分布する洪積台地としての丘陵部と寺院・神社・宅地・墓地・畑・林・藪・森・山・田・草生・塩湊・葭生が混在する沖積地に分けた。さらに沖積地を寺院・神社・宅地・墓地・畑・林・藪・森・山などが主に集まって分布する地点を微耕地群、田・草生・塩湊・葭生などが主に集まって分布する地点を低地部として抽出した。その結果、沖積地の微高地群を 9 ヶ所（微高地群 A ～微高地群 I）と、主に丘陵部から流れる河川による沖積作用を受けたものと考えられる低地部と沖積地の微高地群の間にある低地部を合わせて 16 ヶ所（低地部 1 ～低地部 16）が抽出された。以下、微高地群と低地部について、それらの特徴や前後関係について説明していきたい。

（2）野間地域の微高地群

野間地域にある微高地群は、丘陵部から西にある伊勢湾に面した沖積地に 9 ヶ所ある。

微高地群 A：奥田村の北側丘陵部の南西端部から南西南に伸びる微高地群で、奥田川を挟んで微高地群 B に続く可能性があるものである。最も東側の内陸側に位置する。

微高地群 B：奥田村の南西側から野間村北西側で、微高地群 A から奥田川を挟んで南西南に伸びる微高地群で、最も東側の内陸側に位置する。杉谷川を挟んで微高地群 C に続く可能性があるものである。

微高地群 C：野間村中央部にある小規模な微高地群で、野間村にある中央の丘陵部の北西端部から下りた地点にある。微高地群 B から杉谷川を挟んで南にある。

微高地群 D：上野間村北西端部の伊勢湾に面した丘陵部の麓から南西に海岸に沿って伸びる微高地群で、稲早川を挟んで奥田村に入りやや東側に振れて南へ伸びる。

微高地群 E：奥田村西側中央部で微高地群 D から南に位置する微高地群で、微高地群 A から低地部 9 を挟んで西にある。奥田川を挟んで、微高地群 B や微高地群 G に続く可能性がある。

微高地群 F：奥田村西側中央部の奥田川の北で伊勢湾に面してほぼ南北に伸びる微高地群で、その南端部が微高地群 E と重なる。微高地群 E から低地部 10 を挟んで西にある。奥田川を挟んで、微高地群 G に続く可能性がある。

微高地群 G：奥田村南西部から野間村北西部にかけて、奥田川の南で微高地群 B の西で微高地群 H の東にある微高地群である。この微高地群の西側で微高地群 H と南東側で微高地群 B と重なり、南側で東に振れる。

微高地群 H：奥田川の南で奥田村南西端部から野間村北西端部の伊勢湾岸に沿ってある微高地群でほぼ北から南に伸びる。

微高地群 I：野間村南西部で杉谷川の南で富具崎川の北に位置する微高地群で、杉谷川に面した北側で東西に広く、富具崎川に面した南側で東西に細くなる。後に述べる微高地群 B ～微高地群 H との関係から、現在でも現地にて確認できる 3 ヶ所の谷状地形 a ～ c と微高地群 I にみられる尾根状高まりの分布より、微高地群 I の北東端部から大御堂寺がある北東から南西に伸びる微高地群 Ia と微高地群 I の北側中央部から南西と南に伸びる微高地群 Ib、伊勢湾岸に沿って南北にある微高地群 Ic に細分できる。

（3）野間地域の低地部

野間地域の低地部は、16 ヶ所みられる。

低地部 1：上野間村を流れる稲早川に伴う谷地形で、上野間村の西側の丘陵により南西に折れて広がる。稲早川は低地部 1 の南西端部において微高地群 D を切って伊勢湾に流れる。

低地部 2：奥田村の北西端部で丘陵部から流れ

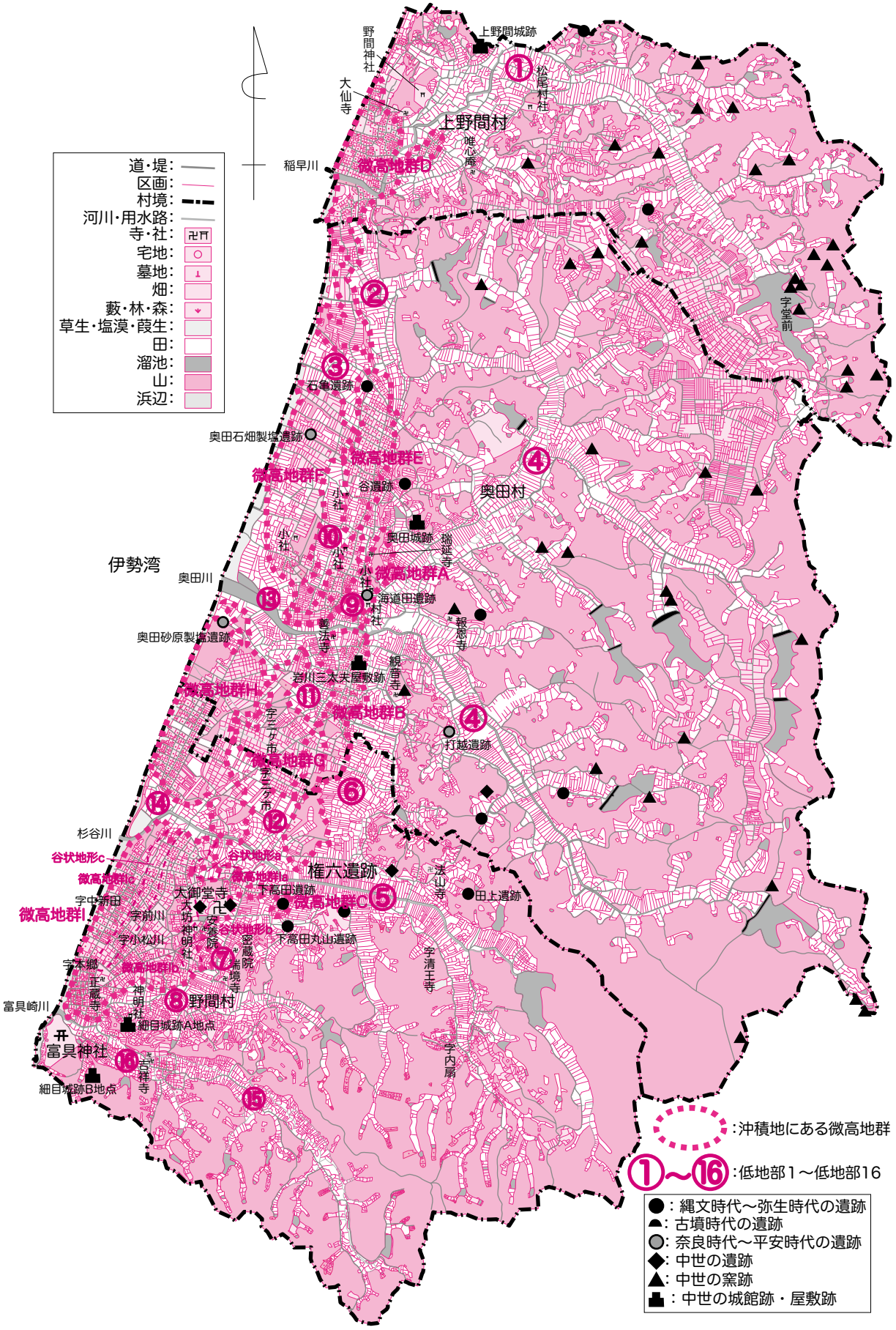


図8　野間地域の地籍図（約1：30,000）

る河川による影響を受けた谷地形ではあるが、奥田村北西端部の丘陵から下りた地点で微高地群Dや微高地群Eの影響を受けて、その南橋部と西側が閉じられた形になっている。

低地部3：低地部2からの小河川が微高地群Dと微高地群Eの間から流れ出た谷地形ではあるが、低地部3の南東側は微高地群Eと微高地群Fの砂堆の堤間湿地の一部と考えられる。

低地部4：奥田村を流れる奥田川の上流域から中流域に伴う谷地形で、奥田村の北東部と南東部の丘陵から流れる河川に伴った二つの大きな谷地形である。この低地部の西側は微高地群Aと微高地群Bにより閉ざされている。

低地部5：野間村北側を流れる杉谷川の上流域から中流域に伴う谷地形で、杉谷川は微高地群Bと微高地群C、微高地群Hと微高地群Iの間を西に流れて、伊勢湾に流れ出るが、この低地部は、西側を微高地群Hと微高地群Iにより閉ざされている。低地部5の北側で低地部6と重複し、西側で低地部7と低地部12と重複する。

低地部6：奥田村と野間村の村境が通る丘陵部と微高地群Bの間を南北に広がる低地部で、現在の地形の傾斜から、かつてはこの地点を杉谷川が北に折れて奥田川に流れていた可能性がある。この低地部の北側で低地部4と南側で低地部5と重複する。

低地部7：野間村中央部の丘陵部と微高地群Iの間を北東から南西に広がる低地部で、微高地群Cと微高地群Iの砂堆の堤間湿地の一部と考えられる。この低地部の北側で低地部5と南側で低地部8と重複する。

低地部8：野間村南側を流れる富具崎川にふぐ神社の北の地点で合流する河川に伴う谷地形で、北側で低地部7と重なり、南西端部で東から伸びる丘陵と微高地群Iに閉ざされた形に見える。

低地部9：奥田村中央部西側の微高地群Aと微高地群Eの間を南北に広がる低地部で、この2つの微高地群の堤間湿地の一部と考えられる。

低地部10：奥田村中央部西側の微高地群Eと微高地群Fの間を南北に広がる低地部で、南端部を微高地群Fにより閉ざされている。この2つの微高地群の堤間湿地の一部と考えられる。

低地部11：奥田村南西部の微高地群Bと微高地群Gの間を南北に広がる低地部で、南端部が南から東に折れた微高地群Gにより閉ざされている。この2つの微高地群の堤間湿地の一部と考えられる。

低地部12：野間村北西部の微高地群Bと微高地群G、微高地群Hに囲まれた北北西から南南東に広がる低地部で、微高地群Gと微高地群Hの堤間湿地の一部と考えられる。この低地部の南側は低地部5と重なる。

低地部13：奥田川の下流部から河口の周囲に広がる低地部で、北側を微高地群Fに南側を微高地群Hに挟まれた範囲となる。

低地部14：杉谷川の下流部から河口の周囲に広がる低地部で、北にある微高地群Hと南にある微高地群Iに挟まれた範囲となる。

低地部15：野間村南側を流れる富具崎川の上流域から中流域に伴う谷地形で、この低地部の西端部は富具崎川の南にある丘陵と北にある丘陵から南東に伸びる微高地により閉ざされたように見える。

低地部16：野間村南側を流れる富具崎川の下流部から河口の周囲に広がる低地部である。

（4）地形の形成過程

ここでは、先に抽出した微高地群と低地部の位置関係からその形成過程を示す。野間地域の微高地群を形成する砂堆は、伊勢湾との海岸線に沿ったやや弧状で南北方向に伸びるもので、丘陵部から3列の砂堆列が確認できる。これらの特徴は、伊勢湾からの波浪と季節風などによる影響で堆積したものと考えられる。このような海岸に並行する砂堆列は、東にある内陸側の微高地群が古く、西にある海岸側の微高地群が新しく形成されたと考えられる。地籍図にみられる河川との関係では、比較的大きな4河川は微高地群を切って流れており、下流部にもその影響を受けたと考えられる低地部が広がることから、河川からの影響は比較的新しいものと考えられた。また東側の丘陵部から伊勢湾に流れる河川の軸線と、微高地群の軸線は対応しておらず、河川堆積による影響は小さいものと考えられる。

以上の前提から、まず奥田川の北では微高地群の間にある低地部の埋まり方から、低地部2は微高地群Dと微高地群Eにより西側が閉ざ

されていることから、これらより古く、低地部3と低地部10はそれぞれ南側が微高地群Fにより閉ざされていることから微高地群Fより古いものと考えられる。同様に低地部9は微高地群Aより新しいが、海岸側にある微高地群Eよりは古い。

奥田川の南では、低地部6が微高地群Bの東にあり形成は古いが、杉谷川からの支流が流れていた可能性もあるものである。低地部11は微高地群Gにより南が閉ざされていることから、これより古く、低地部12は微高地群Gの南西の海側にあって微高地群Hの内陸側にあることから、微高地群Hよりは古いものと考えられる。

杉谷川の南では、低地部7と低地部8は微高地群Iより内陸側にあることからこれらより古いものと考えられるが、微高地群Cより海岸側に中心があることから、微高地群Cよりは新しいものと考えられる。

先の述べた、南北方向の微高地群のつながりと低地部の位置関係をまとめてその地形の形成過程を述べると、

第1段階：微高地群A・微高地群B・微高地群C・低地部2・低地部9・低地部7、

第2段階：微高地群D・微高地群E・微高地群B・微高地群I(Ia)・低地部3・低地部10・低地部11・谷状地形a、

第3段階：微高地群F・微高地群G・微高地群B南側・微高地群I(Ia)・低地部13・低地部12・谷状地形a、

第4段階：微高地群H・微高地群I(Ib)・低地部14・谷状地形c、

第5段階：微高地群H・微高地群I(Ic)

の順に形成されたものと考えられる。

そして、この地形の形成過程の時期であるが、第1段階の微高地群Cには下高田遺跡があり、縄文時代早期後半の縄文土器や石器から縄文時代後期、弥生時代前期から古墳時代後期の各時期、奈良時代、鎌倉時代の多くの土器・陶器が確認されている。また第1段階の微高地群Aに奈良時代の海道田遺跡、第2段階の微高地群Eからは弥生時代中期以前の石塚遺跡、第3段階の微高地群Fには奈良時代から平安時代の製塩遺跡である奥田石畑製塩遺跡、第4段階の微高地群Hには奈良時代から平安時代の製塩遺跡である奥田砂原製塩遺跡、そして第2段階の微高地群Iaには平安時代末の創建である大御堂寺が立地している。よって各地形の形成時期は、第1段階の微高地群が縄文時代早期後半以前に遡ること、第4段階の微高地群Hまでが奈良時代以前には形成されていたことが確認できる。また第5段階の微高地群Icにほぼ位置する江戸時代の一色村は、江戸時代前期までには存在しており、富具崎川に面した「字本郷」の字名の南側部分から村が開発され、多くの平田船を持っている。そして、江戸時代以後に微高地群Icの中央から北側に酉新田（寛文九年縄入れ）と中新田がみられる（美浜町誌編さん委員会編1980）。したがって微高地群Ibと重複する地点は奈良時代以前に形成されており、第5段階の微高地群Icの形成時期は中世から江戸時代前期にかけての時期と想定したい。

（5）地籍図にみえる寺院・神社と地名

次に地籍図に残る寺院・神社、地名（図8）と寛文11年（1670）に尾張藩に残された『寛文村々覚書』（名古屋市教育委員会編1983、以下同じ）にある上野間村（地籍図における上野間村）、北奥田村（同奥田村）、南奥田村（同奥田村）、柿並村（同野間村）、大御堂寺領（同野間村）、一色村（同野間村）、細目村（同野間村）の記述の関係を分析する。

『寛文村々覚書』上野間村の項には、「大仙寺」、「唯心寺」、「大日堂」、「薬師堂」が記されており、唯心寺は大仙寺の末寺で、大日堂は唯心寺持内で、全て寺内を前々除とされており、これらの4寺院は16世紀以前に創建された寺院と考えられる。この中で、地籍図の中には大仙寺と唯心庵が残っており、大日堂は字堂前の地にあったとされる（美浜町誌編さん委員会編1980）。神社では、「明神」、「天神」、「山神四社」が記されており、社内を前々除とされている。地籍図の中では、野間神社とされる神社が江戸時代後期の天保年間に描かれた上野間村村絵図（村絵図は美浜町誌編さん委員会編1980を参考にした、以下同じ）には、「天神」と記述されており、他の神社は「山神」とされている。地籍図の中では、明神社の位置は不明である。

『寛文村々覚書』の北奥田村の項には、南奥

田村の報恩寺の末寺である「瑞松寺」と「清久寺」があり、寺内を瑞松寺が備前検除、清久寺が年貢地とされており、これらの寺院は 17 世紀初頭までには創建されていた可能性が高い。神社では、「神明」、「八幡」、「山神六社」が記されており、社内を前々除とされている。瑞松寺は『尾張徇行記』（名古屋市教育委員会編 1984、以下同じ）に、正保四年（1647）に寺号を瑞延寺に改むとあることから、地籍図にある瑞延寺で確認できるが、北奥田村村絵図に瑞延寺の北西にみえる建久寺は地籍図の中にみられない。神社では、同じく北奥田村絵図に「氏神山王神明宮」とみえる神社が地籍図の「村社」であり、同様に「八幡社」は瑞延寺の西にある「小社」に当たる。地籍図の中にある他の「小社」は山神と考えられるが、山神六社の全ての位置は特定できない。

『寛文村々覚書』の南奥田村の項には、「報恩寺」と報恩寺末寺の「善法寺」があり、報恩寺が寺内を備前検除、善法寺が寺内を年貢地とされており、これらの寺院は 17 世紀初頭までには創建されていた可能性が高く、地籍図の中にも確認できる。神社では、「山神八社」があり、社内を前々除とされているが、地籍図では、これらの場所を特定することができない。

『寛文村々覚書』の柿並村の項には、「瑞境寺」が記されており、寺内を備前検除とされていて、地籍図の中にもその位置を確認できる。また神社は「若宮」、「八幡」、「山ノ神三社」があり、社内を前々除とされており、柿並村村絵図には、瑞境寺の西から南西に描かれているが、地籍図の中では、その位置を特定できない。

『寛文村々覚書』の大御堂寺領の項には、「大御堂寺」とその子院と思われる「大坊」、「密蔵院」、「南ノ坊」、「中ノ坊」、「北ノ坊」、「常楽坊」、「法山寺」、「田上薬師堂」があり、大坊、密蔵院、南ノ坊、中ノ坊、北ノ坊、常楽坊、法山寺は寺内を前々除、大御堂寺本堂等は大坊引得、田上薬師堂が法山寺引得とされており、これらの寺院は 16 世紀以前には存在したものと考えられる。『尾張徇行記』によれば、「往昔安養院ハ南ノ坊　慈雲院ハ中ノ坊　竜松院ハ北ノ坊　円明院ハ常楽坊ト号セシカ宝暦四戊年願ヨッテ今ノ院号ニ改ムトナリ」とあり、地籍図の中では、大御堂寺と大坊、密蔵院、南ノ坊の安養院、法山寺、田上薬師堂は確認できるが、その他の寺院は確認できない。しかし、江戸時代後期の天保年間に作成された徳川林政史研究所所蔵の村絵図には、「大御堂寺」の北に隣接する位置に「圓明院」が、「アンヨウイン」の北で大御堂寺の南の道を挟んだ位置に「リウシヤウイン」が、「リウシヤウイン」の東隣の位置に「慈雲イン」が描かれており、おおよその位置がわかる。神社では「大御前」、「別山」、「大汝三社権現」が記されており、社内を大坊引得とされているが、地籍図の中では、その位置が特定できない。

『寛文村々覚書』の一色村の項には、南奥田村の報恩寺末寺の「正蔵寺」が記されており、寺内年貢地とされている。その創建は 1640 年とされ、地籍図の中にもその場所が確認できる。神社では「白山」、「山神二社」があるが、地籍図では、位置の特定ができない。

『寛文村々覚書』の細目村の項には、「吉祥寺」が記されており、寺内を年貢地とされている。神社では「風宮大明神」、「山神二社」が記されており、社内を前々除とされている。風宮大明神は『尾張徇行記』に「棟札二中奥永正巳巳年当村之城主緒川殿再建立同奉行光長ト記アリ」とあり、16 世紀初頭以前に社が存在したものと思われる。地籍図においては、山神二社の位置を特定できないが、吉祥寺と富具神社である風宮大明神は確認できる。

以上のように神社は『寛文村々覚書』において一色村の 2 社を除いて他は社内を前々除とされており、寺院においても同じく寺内を前々除とされる上野間村の大仙寺、唯心寺、大日堂、薬師堂や大御堂寺領の大御堂寺と大坊、密蔵院、南ノ坊（安養院）、中ノ坊（慈雲院）、北ノ坊（竜松院）、常楽坊（円明院）、法山寺、田上薬師堂については、16 世紀以前には存在した可能性が高く、中世に遡るものもあるものと思われる。寺院については地籍図の中にもその位置が確認できるものが多くあるが、神社については神社の名称の変化や合祀、移転などにより、地籍図にその位置を確認できないものも多くある。この中で、大御堂寺は『吾妻鏡』に残るように、12 世紀後半に源義朝の墓が荒れていた為、平康頼が水田 30 丁を寄進して小堂を建て僧六口

により不断念仏があったことや、その後の文治六年（1190）の源 頼朝の墓参以後に伽藍が整備されたとあることからも、現在に至る変遷が多くあるものと考えられるが、鎌倉時代以前にその創建が遡る可能性が高い。他に残る寺院地名では、地籍図の野間村北部の法山寺の杉谷川を挟んだ南岸に字清王寺があり、かつて古い寺院が存在した可能性がある。

その他に地名として、本論との関係で挙げたいのは、奥田村西側南端と野間村西側北端の村境を挟んである字三日市の地名である。江戸時代の文献資料には、市がこの場所で開かれた記述を確認できないので、中世に遡る地名である可能性が高いものである。

（6）野間地域における河川の河口

先述のように、上野間村の稲早川、奥田村の奥田川、野間村の杉谷川の上流部には、山茶碗や小碗、小皿、壺、甕、瓦などを焼成した多くの窯跡が分布する。特に稲早川と奥田川の上流部においては、窯跡が集中して分布する地点もみられる。そして、これら窯跡で生産された陶器類は河川の谷を経て河口から搬出された可能性がある。地籍図の中には港などの記述はないが、現在の稲早川と富具崎川の河口部に漁港がある。そこで北から稲早川、奥田川、杉谷川、富具崎川の河口について地籍図にみられる川幅と河川を渡る橋の位置について検討する（図 8）。

稲早川は河口から東に進み、集落部分で北東に折れて伸びる。河口部は幅 11 間 2 尺と川幅が広く、宅地が広がる微高地群 D を南からきた道が左岸の宅地が途切れる辺りで川幅が 8 間～9 間とやや川幅が狭くなり、この地点で右岸に渡る橋がある。奥田川は河口部で川幅 36 間 2 尺と右岸に接してある池を含めて考えると川幅が広く、宅地のある微高地群 B を南から伸びる道が川を挟んで微高地群 A の南端に橋がかかる。この地点の川幅は 6 間～8 間になり、川に沿った田の範囲が狭くなる地点である。杉谷川では河口部から 3 ヶ所の橋があるが、河口から一つ目の橋は、明治 17 年作成の地籍図には描かれているが、天保年間に描かれた柿並村村絵図には描かれていない。この川の河口部の北側に接して塩濱と記述される区画があり、河口部の川幅は 10 間 2 尺と広いが、微高地群 Ic の宅地部分を南から道が河口部の塩浜の東端で川幅が 4 間となる地点で北に渡る河口から一つ目の橋がある。河口から二つ目の橋は、微高地群 Ib を南から来た道が川幅 2 間と狭くなった地点にあり、河口から 3 つ目の橋は、微高地群 Ia の北端部から水田部分を通り、微高地群 B に至る地点に渡る橋があり、この地点の川幅は 2 間と狭い。富具崎川は河口部の川幅が 8 間以上あり、河口から 180m 程の地点で川幅 3 間～4 間程になる地点で、右岸の微高地群 Ic から南の富具神社のある左岸に渡る橋がある。

野間地域の河川は河口では幅が広く、橋は河川の幅が狭くなり、微高地群を短く結ぶ地点にかけられている。奥田川や杉谷川、富具崎川の橋がかかる地点付近より海側の河川両岸は低地部として地籍図中に田として表現されており、南奥田村村絵図の奥田川河口の南岸に「濱新田」、柿並村村絵図と一色村村絵図の杉谷川北岸に沿って「辰新田」（天保三年の縄入れ）とある。これらのことから、河川の河口部の入江は、地籍図の土地利用からみた地形形成の第 5 段階の微高地群 H や微高地群 Ic がある伊勢湾沿岸の砂堆形成に伴い入江が埋没し、江戸時代までに水田化がなされたものと考えたい。江戸時代以前の橋で河口から橋がかかる地点の距離は、稲早川では 350m 程、奥田川では 820m 程、杉谷川で 400m 程離れているが、富具崎川では河口から 180m 程の距離にあり、河口から近い。よって、ここで想定した河口からの入江は、標高も低く、現在の河川においても海水の満ち引きが見られる範囲であることから、河川の河口の入江と河口周辺の海岸の浜辺に船が着けられ、船が行き交った港津を想定したい。

江戸時代前期の『寛文村々覚書』には、一色村の項に「平田船四二艘　舟役御用之時、舟并水主出ス」とあり、小野浦村の項に「廻船九艘

運上銀出。」と「小舟弐拾艘　舟役御用之時、舟并水主出。」とあり、内海の東端村・西端村と並んで周辺の村々に比べて突出した舟数が記録されている。これらは江戸時代後期に展開する「野間船」や「内海船」と呼ばれる船団のルーツと考えられるもので、室町時代の守護一色氏の支配から戦国時代の知多大野の佐治氏、緒川の水野氏の進出（杉崎 1983 など）と関連する

ものと思われる。中世後期にさかのぼる可能性のある一色村や小野浦村の『寛文村々覚書』の状況は、中世前期の陶器類を焼成する窯跡が営まれた状況とは異なる社会・経済の中で形成されてきたものと考えられる。またこのことと関連するものか、一色村の項には「海辺囲堤百四拾六間」の記述があり、江戸時代前期には海辺が護岸されていたものと考えられる。（蔭山誠一）

4．野間地域における歴史的景観

先に検討した遺跡の活動の特徴と地形の状況から、各時期の景観を推定する。

奈良時代から平安時代前半までの開発の特徴は、山王川の河口のある海岸に面した浜辺周辺に、寺院跡の可能性がある海道田遺跡を中心にとして製塩遺跡の奥田石畑製塩遺跡と奥田砂原製塩遺跡が山王川の河口を挟む海岸沿いの南北約 1.5km に展開する。また調塩などの搬出の湊にも山王川の河口にある入江が推定される。これらの遺跡群は、限定した範囲において集中的な活動が行われた様子がうかがわれる。

平安時代末から鎌倉時代までの開発の特徴は、大御堂寺とその子院群、そして集落遺跡としての権六遺跡、下高田遺跡、下高田丸山遺跡などの 1km 程の範囲にある寺院や集落遺跡があり、海岸を望む周囲の丘陵部には瓦や陶器を焼成する窯跡が営まれた。また江戸時代の各村に対応する中世の集落遺跡は不明であるが、先に述べたように中世に遡る神社の存在が想定され、その周辺には集落遺跡が存在した可能性がある。この想定は、丘陵部に分布する窯跡の生産活動が専業工人によるものか季節的分業による工人によるものかは不明であるが、窯跡の工人が孤立した存在であったのではなく、丘陵部の窯跡付近か伊勢湾岸沿いの集落遺跡との交流関係の存在を前提にしたものと考えられるからである。一方寺院については、中世前期には野間地域を除いて、明確に寺院が確認できず、この時期には大御堂寺とその子院群からなる寺院が集まって存在した可能性が高い。中世後期には上野間地域において、大仙寺、唯心庵、大日堂などが 16 世紀以前に創建されて存在した可能性が高い。

大御堂寺とその子院群、そして大御堂寺周辺にある権六遺跡、下高田遺跡、下高田丸山遺跡などの遺跡群は、当地に営まれた野間内海庄と関わるものであり、瓦を焼成する窯跡は、12 世紀前半の京都鳥羽東殿に造られた安楽寿院の建造に伴う瓦の供給を契機にしている可能性がある。各窯跡で焼成された瓦や陶器類は窯の存在する谷に沿って下流に運ばれ、野間地域の上野間の稲早川、奥田の山王川、野間の杉谷川の浦状となった河口付近から各地に搬出されたものと考えた。また奥田地区と野間地区の境付近にある字「三日市」は、中世に遡る市の存在を想起させるものであり、山王川と杉谷川の間に位置する。この地域で生産されたものは、各河川を通じてその河口部から搬出され、外部から搬入される物質は、山王川や杉谷川から荷揚げ取引され、この市に集められて商売されたのかも知れない。この「三日市」のある地点は、知多半島の西海岸を南北に伸びる西浦街道も交差する地点にあり、先に述べた大御堂寺などからも 0.5km 程と比較的近在にある。これらの遺跡群は野間地域全域に及び、この時代の中心となる大御堂寺周辺と周辺の丘陵部に瓦や陶器類の窯跡が多く営まれ、その生産物は近くの河川を通じて運び出され、各地との交易が行われた。また交易品は定期市などを通じて、地域の内外において消費された*（図 9 図）。

そして室町時代になると先に述べた中世に遡る寺院や神社と城館跡が確認できるのみであるが、16 世紀には野間の船が内海の船とともに、伊勢大湊に出入りをして交易をしたことが知られている（竹内 1983・伊藤 2007 など）。江戸時代前期の『寛文村々覚書』では、内海の東端村と西端村の廻船や野間の小野浦村と一色村などに多くの廻船や平田船などの記録が残されて

*権六遺跡の出土遺物中で搬入されたものは、少量ではあるが青磁、白磁、滑石製石鍋、渥美産陶器類、瀬戸産陶器類がある。他に柱穴跡から出土した柱、礎板で、樹種同定を行った 10 点でヒノキ、マツ属複維管束亞属、クリ、スダジイがあり、5 点あるヒノキの木材は外から搬入された可能性がある（蔭山編 2017）。

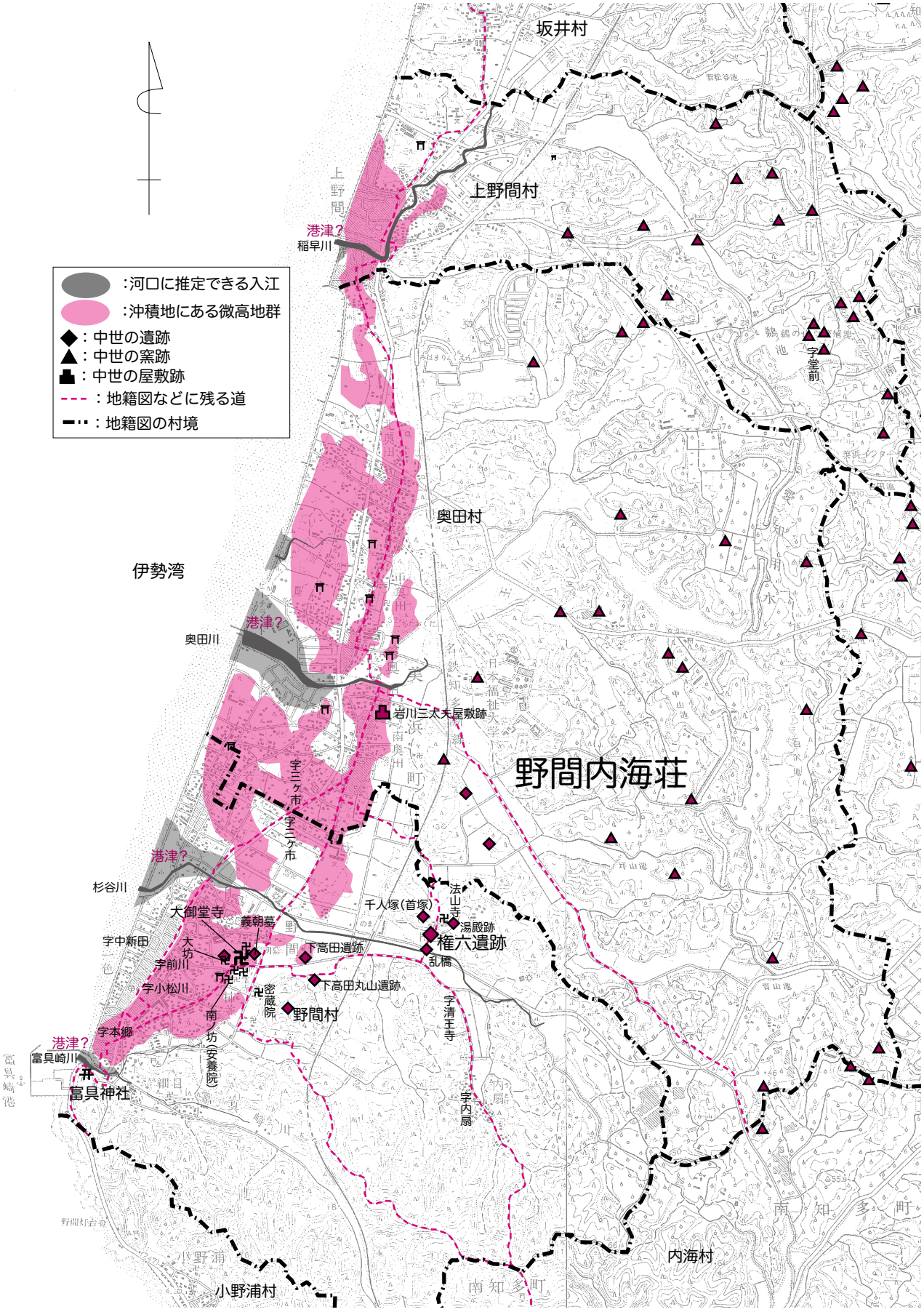


図9　中世における野間の想定図（約1：30,000）

おり、瀬戸内や関西地域の塩や木材を伊勢湾地域や江戸の方面に送る「野間船」や「内海船」といった一群に成長していく姿が想定されている（竹内 1983）。これらの船は、内海の入江や野間一色の南側にある富具崎川の入江、先の山王川の入江を経由していたものと考えたい。また『寛文村々覚書』には、野間地域周辺の村について村の家数などが記録されており、江戸時代の村絵図に近い状況が想定できる。この村々の状況は、窯業生産を終えた村々の姿と考えられる。

以上の野間地域における奈良時代から江戸時代にかけての主に３つの景観は、時代とともに地域の生業が変化し、それに伴って海運などの交易のあり方が変わることを示す一つの地域例として挙げることができるものと思われる。（蔭山誠一）

本稿に関わる調査をする中で、大御堂寺野間大坊住職水野眞圓氏、密蔵院住職服部秀弘氏、美浜町教育委員会の河村伸吉氏・相川多恵子氏・磯部利彦氏・梅本真雄利氏には、大変お世話になった。また小栗康寛氏、松田 訓氏、鬼頭 剛氏には多くのご教示をいただいた。記して感謝の意としたい。

参考文献

愛知県教育委員会 1999『知多半島遺跡詳細分布調査 報告書』
愛知県郷土資料刊行会 1983『寛文村々覚書（下）地方古義』「名古屋叢書続編」第三巻
愛知県郷土資料刊行会 1984『尾張徇行記（5）』「名古屋叢書続編」第八巻
伊藤裕偉 2007「第五章 屋号から見た中世後期の地域構造」『中世伊勢湾岸の湊津と地域構造』岩田書院
磯部利彦 2001「奥田製塩遺跡」『伊勢湾考古』15　知多古文化研究会
磯部幸男・奥川弘成・森 崇史 1998『海道田遺跡緊急調査報告書』「美浜町文化財報告 第５集」美浜町教育委員会
上村喜久子 1989「第五章中世 第一節 半島内の荘園・国衙領と武士」『半田市誌』本文篇上巻、半田市
上村喜久子 2010『尾張の荘園・国衙領と熱田社』中世研究叢書 21、岩田書院
梶原義実 2010「海道田遺跡」『愛知県史 資料編考古４ 飛鳥～平安』愛知県
佐野 元 2007「釜ヶ洞１号窯跡」『愛知県史 別編 窯業２ 中世・近世 瀬戸系』愛知県
柴垣勇夫 1982「尾張における平安末期の瓦生産」『愛知県陶磁資料館研究紀要 1』愛知県陶磁資料館
柴垣勇夫 1989「12 世紀における中世窯の成立–東海地方瓷器系窯成立期の様相–」『東洋陶磁』17、東洋陶磁学会
杉崎 章・磯部幸男・宮川芳照・山下勝年 1972『奥田製塩遺跡』「美浜町文化財調査報告 第１集」美浜町教育委員会
杉崎 章・山下勝年・磯部幸男 1977『下高田遺跡』「美浜町文化財報告第４集」美浜町教育委員会
杉崎 章 1983「第四節 武士勢力の発展」『美浜町誌』本文編、第二章 古代から中世へ、美浜町役場
竹内久子 1983「第三節 海運と漁業」『美浜町誌』本文編、第三章 近世、美浜町役場
立松 宏 1967「高田遺跡出土土器を中心として」半田市誌編纂委員会
立松 彰 2010「奥田石畑製塩遺跡」『愛知県史 資料編考古４ 飛鳥～平安』愛知県
常滑市誌編さん委員会 1974『常滑窯業誌』常滑市役所
永井邦仁 2014「愛知県における中世瓦の展開とその特徴」『研究紀要』第 15 号、愛知県埋蔵文化財センター
中野晴久 2012「第１章総論 第３節常滑窯」『愛知県史 別編 窯業３ 中世・近世 常滑系』愛知県
早野浩二 2010「製塩遺跡の空間構成についての基礎的研究」『東海土器製塩研究』考古学フォーラム
半田市立博物館 1993『知多の古瓦』
松澤和人・佐野元 2000「菱野丘陵窯跡群（下）」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第８輯、財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
水野輿円 1922「尾張国知多郡野間村に於ける窯址出土古瓦に就いて」『考古学雑誌』第 13 巻第１号、考古学会
美浜町誌編さん委員会編 1980「一〇 細目村」・「一一 一色村」・「一二 柿並村」・「一三 南奥田村」・「一四 北奥田村」・「一五 上野間村」『近世村絵図集（解説）』美浜町誌 資料編一、美浜町、村絵図はこの文献に添付してあるものを参考にした。
山下勝年 1972「野間高田遺跡採集の遺物について」『みなみ』14 号、南知多郷土研究会
山下勝年・奥川弘成 1985「第１節　原始・古代」第２編文化財、第１章史跡・考古資料『美浜町誌』資料編二、美浜町役場